



特定非営利活動法人

神戸日独協会会報

BERICHTE DER NPO JAPANISCH-DEUTSCHEN GESELLSCHAFT KOBE

Nr. 367

Februar 2022

NPO法人 神戸日独協会

〒651-0087

神戸市中央区御幸通8-1-6 神戸国際会館19F

TEL/FAX 078-230-8150

郵便振替 01160-9-18199

E-mail: info@jdg-kobe.org URL <http://www.jdg-kobe.org/>

NPO JAPANISCH-DEUTSCHE
GESELLSCHAFT KOBE

International House Kobe 19F

Goko-Dori 8-1-6 Chuo-Ku

651-0087 KOBE/JAPAN

コロナ感染第6波の拡大にあたって

NPO法人神戸日独協会会長 柘田 義一

新年から全国的にコロナ感染の第6波が急激に拡大しています。兵庫県でも感染者数が日々更新されています。会員の皆様にお見舞いを申し上げます。

昨年10月に感染拡大が全国的に減少し、長期にわたったコロナ禍も収束へ向かうのではと光明を見出したものでした。感染予防に十分に配慮した上での社会活動の再開が至る所、至る分野で見られましたので、当協会も会報363号(2021年10月発行)にて「神戸日独協会は活動を再開します」と宣言をしました。それに基づき、10月下旬に懸案であった「日独交流160周年記念講演会」の開催、ドイツ語講座・ドイツ文化教室の対面授業化、休会していた談話室の再開、会員企画の催しの開催など、コロナ禍以前の活動の復活を目指してきました。

昨秋の日本の感染状況とは裏腹にヨーロッパではウイルス新株による感染が拡大しつつありました。その感染の波が遅れて現在日本全国を襲い、これまでになく感染者数を急激増加させています。ただ、これまでの感染の波の襲来時とは異なり、ワクチン接種の普及とウイルス新株が感染力は強いが重症化には至らせないというウイルスの性質の相違からか、「緊急事態宣言」は発令されずに社会的活動の維持が続けられています。

今回の感染急拡大に対して、神戸日独協会では特に新たな措置は講じていません。ドイツ語講座・ドイツ文化教室はクラスの事情に応じてオンライン授業への移行並びに併用、或いは対面授業の継続を行っています。その他の特別講座、談話室・Stammtisch等の活動、その他の催しは、これまでの感染時と同じ対応を取っていただいています。もちろん対面形式の場合はマスクの着用などの感染予防策を講じています。

昨秋から協会としての活動を始動し、新年に入り会員皆様と一緒に活動を盛り上げようとの意気込みでしたが、この感染拡大により水を差された感があります。しかし昨年より感染対策として導入してきたオンライン(ZOOM)をいろいろな分野で活用をしていきます。また、協会活動の発信と会員相互の交流のために公式SNSの導入などを現在検討しています。コロナ禍における協会活動にご意見をお寄せください。今後とも協会活動へのご協力を宜しくお願いいたします。

ドイツ文化特別講演会(ZOOM講演会)のご案内

会報前号にてご案内しましたが、ドイツでの日本語教育に関するドイツ文化特別講演会が開催されます。このドイツ文化特別講演会は神戸日独協会の杉谷眞佐子・林良子両理事の提案で開催されます。林理事は「日本でのドイツ語教育」・「ドイツでの日本語教育」関係者の学会「JaF-DaFフォーラム」を主宰されており当学会との共催が可能となりました。講演会はドイツから参加の講師の都合やドイツ側参加者の多いことから、例外的に金曜日夜に開催されます。

なお、島田先生の基調講演に引き続き、ドイツ・日本における語学教育の実践報告および情報交換会も開かれます(21:30終了予定)。

日 時 : 2022年2月18日(金)19:00~20:00(ドイツ時間11:00~12:00)

テ ー マ : 「ドイツで『日本』を教えるということ」

デュッセルドルフ大学現代日本学科には学士コースから博士コースまで現在約700人以上の学生が在籍しており、ドイツ内で最も規模の大きい日本学系の学科となっている。1985年に設立された学科としては大きな発展だったと言えるであろう。学生の持つ興味は多岐にわたり、特に日本のポップカルチャーと共に育ち、それに憧れて入学してくる学生も多く存在する。加えて長期日本滞在の経験を持つ学生もおり、学生の多様性が当学科の一つの強みでもある。今回の講演ではこうした学科における問題、指導の方向性やさらに日本学の持つ根本的な学問的問題などのテーマを多くの例を交えて議論する予定です。

担当講師 : デュッセルドルフ大学 現代日本学科教授 島田信吾氏

略歴:1957年大阪府生まれ。1972年渡独。1979年アビトゥア取得。ミュンスター大学にてドイツ言語学専攻、1988年 Magister Artium 取得。エアランゲン・ニュールンベルク大学社会学博士課程において1992年博士号取得。1997年 Habilitation(教授資格)取得。2002~2005年ハレ・ヴィッテンベルク大学比較文化社会学教授を経て2005年より現職。

申 込 : 2月12日までに事務局までメール(info@jdg-kobe.org)でお申し込みください。

ミーティングID、パスワードなどについてメールにてご連絡いたします。

会員による企画

「我が家で迎える祝祭」

一昨年来のコロナ禍で外出自粛等の諸制限により、クリスマスなどを祝うこともままならない状態が続いてきました。さらに以前のように料理教室などで会員が集う機会もなくなりました。このような事態から、コロナ禍でも工夫を凝らして会員の皆さんと一緒に「自宅でドイツの家庭でのような楽しいクリスマスを迎える」企画を12月に行いました。コロナ禍の影響が残る中、感染予防に十分

配慮した上で、作品の創作や料理では講師と参加者同士がお互いに助け合って各自の作品を作成し、参加者同士の交流もでき、会員の皆様(2名の男性会員共々)と楽しくクリスマスを迎える準備ができました。

現在はまだまだコロナ禍にありますが、会員の皆さんと楽しく共同作業をして「ドイツの文化・ドイツの伝統的な祝祭」についても理解を深めるために、参加会員からのご希望もあり、同じ講師陣による「我が家で迎える手作りオースタン Osteren」を企画しました。例年とは一味違うオースタンを皆さんと迎えましょう。

第2回 「我が家で迎える手作りオースタン」

キリストの復活を祝う「復活祭 Osteren」、ドイツなどでの「卵探し」を連想される方も多いことでしょう。復活祭と卵・ウサギの関連については、下記の日下部さんのお話をご覧ください。

今回はオースタンの食卓を飾るお菓子和装飾品と一緒に作りましょう。

講師と内容

日下部管子さん：オースタンに因むお菓子(ウサギの白玉餅、ウサギのバタークッキー)

小田晶子さん：オースタンのはがきなど作成

柘田節子さん：オースタンの額(オースタンアイアー)

日 時：3月5日(土)13:00~16:00

場 所：神戸日独協会会議室

定 員：15名

参加費：1500円(材料費+部屋使用料)

申 込：3月3日までに電話・Fax、メールにて協会事務局へお申込み下さい。

材料の準備は講師が行います。マスクの着用をお願いします。

復活祭(オースタン: Osteren)のお話

料理研究家 日下部 管子

ドイツの復活祭(春分の日満月の次の日曜日、今年は4月17日)はクリスマスと並ぶ大切なキリスト教の行事で、新しい命の象徴とされる卵(オースタアイアー-Ostereier)と、多産の象徴とされるウサギ(オースタハーゼ-Osterhase)の形をしたチョコレート菓子などが街のショーウィンドーに華やかに並びます。そうして、この日の朝は子供たちが、庭を駆け回ったり、部屋の中を必死でお菓子でできた卵やウサギを探し回ります。

さて、復活祭の祭事の象徴でもある、卵とウサギの起源はいつごろから始まったのでしょうか？

その起源は中世の頃まで遡り、農民達は復活祭直前の木曜日(緑の木曜日ともいう)が地主への地代を払う時期でした。また、その時期は断食の期間に入っていたため、農家の人たちは卵を食べることもできないため、たまった卵を茹で卵にして地代の支払いに充てていました。そして卵と一緒に自分たちの畑で狩りをしたウサギも地主に収めていたようです。

中世(17世紀頃)から時が流れ、第二次世界大戦後、チョコレート会社がウサギや卵に目を付け、復活祭に合わせてチョコレートでその形を作ったのが今に至っています。

バレンタインデーも同じように、甘いチョコレートで人々の心をとらえたのでしょうか！

会員の広場

このコーナーは、会報を通して会員相互の交流をしていただくための「広場」です。ご投稿をお待ちしています。

(投稿規定: MSPゴシック12ポ、A4 1枚程度まで (多くの方に投稿していただくために、字数を厳守してください)、添付にて毎月第2月曜まで事務局へ)

イエナ便り ー大学での生活ー

会員 竹中らら(イエナ在住)

新しい年を迎え早一か月が経ちました。今回は、イエナ大学での学生生活について書きます。

私が所属する大学院 Auslandgermanistik - Deutsch als Fremdsprache, Deutsch als Zweitsprache では、「外国語としてのドイツ語(DaF)」、「第二言語としてのドイツ語(DaZ)」の理論と実践を学ぶことができます。現在一学期目の私は、一週間後に口頭試験を控えています。教員二名と学生一名による試験が行われ、20分間ゼミナールで学んだ内容をプレゼンテーションします。二学期目になると、授業実践として週に一度、日本・韓国・タイの大学生を対象にオンライン授業を行います。指導教員と先輩学生と共に、授業の準備・実践・評価を行います。今学期のゼミナールで学んだ、授業の方法論・計画・試験の作成方法の知識を活かせるとういと思います。

この大学院は留学生の割合が高く、学習支援も充実しています。例えば、昨年10月には、一週間の対面オリエンテーションが行われました。課程での学修計画や各相談窓口などが紹介され、安心して学習を開始することができました。また週に一度、DAAD(ドイツ学術交流会)の支援による「Integrakurs」という授業があり、学習の戦略やアカデミックライティングの方法を学ぶことができます。また、教育機関や他大学からの講師を招いた対面講座も実施されています。効果的に発表を行うための Visualisierung(視覚化)、Sprechweise(話し方)、Sprechdenken(話す準備としての思考の整理)、Argumentation(論拠の示し方)などを実践的に訓練することができます。

現在授業は主にオンライン形式で行われています。インターネット上の学習プラットフォームに事前に文献がアップされ、それを読んで授業に参加します。ゼミナールの参加人数は5人から20人と様々で、ペアやグループでの話し合いもよく行われます。授業後は、プラットフォーム上にて学生同士でさらに意見交換をしたり、追加の資料を読んで理解を深めます。来学期は対面形式も再開されるということで、新たな出会いや交流を期待しています。

大学では3G-Regel(快復証明、ワクチン接種証明、検査証明の提出が必要)が適用されていますが、基本的に立ち入り自由です。以前大学構内で同級生と話しているとき、見知らぬ男性がこちらを見ていると思っていると「あの方は Herr Professor ○○だよ」と友人が教えてくれ、驚いたこともありましたが、授業でよく顔を知っているはずの教授に、初めて出会うという不思議な体験でした。

このようにイエナ大学にて、授業や講座を中心に充実した日々を過ごすことができます。今後は自らの研究テーマを深めるための準備や活動にも力を入れていく予定です。今年と比較的暖かい冬を迎えているドイツで、引き続き明るく元気に頑張っていきたいと思います。

ドイツ文化特別講座受講感想

「ドイツ語と音楽・ドイツリートとオペラの旋律」の感想

会員 武村 陽子

4回にわたる「ドイツ語と音楽・ドイツリートとオペラの旋律」のZOOM講座の2回目(1月29日)「ウィーン古典派の旋律、モーツァルト、そしてベートーヴェンとシューベルト」に参加しました。今回JDGに出向いて授業を受けましたが、数人の理事の方々以外の参加者は私1人で、他の方は(12名くらい)ZOOMで参加されておられました。Trummer 先生もご自宅からZOOMでの授業でした。

2回目のみの参加でしたので、授業に付いていけるか心配で、また最初は少し難しそうに感じましたが、話を聞いているうちに、音楽についていろんな発見があったことに驚きました。そのうちの特に大きな発見3つを紹介致します。

①最初に、作曲で一番大事なことは何かと全員に問われ、「メロディーが思いつくこと?」「メロディーを思いついたらすぐに紙に書くこと?」などいろいろと考えましたが、答えは「消しゴムで消すこと」でした。

作曲は誰にでもできるが(そうおっしゃったと思います)余分なところを削り落としていくことが大事とのことだそうです。これを聞いて、作曲もある意味本を書く作業と同じことなんだということに気が付きました。長い文章を書くよりも、ページを30ページ分減らしてくださいといわれて、「消す」作業の方が本当は大変なのです。

②2つ目は、18~19世紀の作曲家も前の時代の天才作曲家の模倣から始まったということでした。つまり、ベートーヴェンもモーツァルトの影響を受けたところか、モーツァルトの模倣をした曲があるということで、それを聞かせていただきました。するとどうでしょう。モーツァルトの交響曲第25番(この曲は、映画「アマデウス」のテーマ曲でもおなじみの曲です)と、ベートーヴェンのピアノソナタ1番(へ短調、第1楽章Op2-1)の冒頭の部分が同じ(似ている)ではないですか。これまで何度もそれぞれの曲を別々に何百回も聞いたはずですが、まったく気が付きませんでした。

③イタリア人作曲家サリエリは、映画アマデウスではモーツァルトを毒殺したなどと描かれ、ドイツの文献にも悪く書かれている作曲家なのですが、彼は歴史的な被害者であったということでした。オペラの本場イタリアからウィーンへ出てきた時代にはドイツ語でオペラを書く時代となっており、自身もイタリア語でなくドイツ語でオペラを書かねばならなくなるというハンディを背負い、後の戦争で敵国のイタリア人として悪く言われ、かといって本国イタリアでは、敵国に行った人としてそこでも良く思われない人として歴史に残った被害者でした。しかし、音楽の教育者としては大変優れていて、多くの弟子がいた、その中でもシューベルトをかわいがり、ウィーンのグラーベン通りにあったレモネードのお店でEis(アイスクリーム)をおごっていたという、ほっこりとした話も残っているそうです。

とても楽しい講座でした。ありがとうございました。

ドイツ新事情 —Deutsche Welle の記事から—

2021年の Unwort "Pushback"

会員 柘田 節子

2021年の Unwort「不快で粗悪な言葉」として英語起源の"Pushback"(Zurückweisung)が選ばれました。この語は、国境にいる難民を元居た場所へ押し戻すことを象徴する言葉として使用されました。これはすでに一昨年の移民政策から出たものですが、非人間的なプロセスを言い繕うものとして選ばれました。

Unwort の選定は一般公募によるもので、昨年末までに約1300通が審議会に寄せられました。その大部分は2年にも亘り私たちが襲い社会での緊張をもたらしているコロナ・パンデミックを巡る言葉でした。その年の Unwort としては例年、人間の尊厳の原則あるいは民主主義の諸原則に反し、個々の人間や一定の社会グループを差別し不利益な扱いをするような、偽ってごまかすような言葉がこれに当てはまります。根底では否定的なことを表わすのにも拘らず、婉曲的で遠回しな表現で肯定を装い事実隠蔽を意図した言葉です。記事ではその例として一昨年の Unwort として Corona-Diktatur (コロナ独裁制)と並んで選ばれた Rückführungspatenschaften(本国送還代父母)が取り上げられています。これは2010年9月にEU委員会が、難民の受け入れを拒否しているEUの国々は、難民認定申請を拒絶された者たちを退去させる責任を他の加盟国と連帯して公平に負うという移民政策の新しい仕組みに対しての呼び方でした。Patenschaft(代父母であること)は、キリスト教で洗礼を受ける時に立ち会う保証人たちのことで、一般に実際の父母のように洗礼を受けた子供のことを後々まで社会の中で支える重要な役割を担っています。「助けを必要とする人のために責任を引き受け、支援する」役割と「本国送還」とを結びつけて、「国外追放が人間の良い行為である」かのような皮肉で言い訳がましい表現として使用されたのでした。言葉に対してより敏感になってその語の背後にある真の事態を理解するようにと Unwort が選定されているのです。

昨年はアフリカ諸国からの難民の多くは東欧諸国の国境を越えてドイツを目指しました。これら国境に集まった難民が時には暴力的に追い返されるという事態が発生しました。このような事態でこの Pushback が使用されました。この平易な外国語による表現によって非人道的な事態の本質が隠蔽されてしまうとの懸念も Unwort の選定に大いに影響したのではないのでしょうか。

毎年 Unwort とともにドイツ語協会(Gesellschaft für deutsche Sprache)によって「その年の語」(Wort des Jahres)が選ばれています。1位は Wellenbrecher(コロナ波遮断対策期間/者)。もともとは「防波堤・波よけ」の意味ですが、「コロナ感染の波の遮断」の意味で使用されるようになりました。2位は SolidARität(アール連帯感)。これは昨年ドイツ西部で起きた大水害に関わる語です。特に被害の大きかったライン河支流のアール川溪谷のワイン農家への支援から生まれた混成語です、Solidarität(連帯)と die Ahr(アール川)。3位は Pflexit(プレクシット、看護退場)、これは Brexit(ブレグジット)を範として、Pflege(看護)と Exit(出口・退場)とから作られた混成語です。コロナ禍では医療従事者、介護を担う人たちに大きな負担がかかっているのはドイツでも同じであり、厳しい労働条件や報酬の少なさを理由に、多くの看護従事者が離職している現実から生

まれた語です。以下、4位 Impfpflicht(接種義務)、5位 Ampelparteien(信号機政党)と続きます。興味のある方は、GfdS wählt »Wellenbrecher« zum Wort des Jahres 2021 | GfdSをご覧ください。
Deutsche Welle: Unwort des Jahres 2021: “Pushback” (13.01.2022)より。

(このコーナーは、神戸日独協会ドイツ語講座講読クラスLN(火曜日)の受講者が授業で読んだ記事の中から興味深い up date なニュースを随時会報にて紹介しています)

ドイツ語談話室

第207回ドイツ語談話室

日時：2022年1月15日(土) 14～16時

場所：神戸日独協会 会議室

テーマ：とら年

今回の司会は原田耕作氏が担当し、今年は中国に由来する十二支の“とら年”に当たるが、現在の日本の生活においても、この十二支の伝統が一定の関わりをもっていることを話した。

とら年生まれは一般に、強気で、独立心があり、活動的で、肯定的な性格と言われている。司会者はうさぎ年生まれで、調和的、繊細、洗練、な性格と言われる。このように、それぞれの動物のイメージからくる性格を当てはめているが、すべての人間に当てはまる普遍的な性格の一部であって、どれかが該当するようになっているものだ。

以下に、参加者の皆さんが述べられたテーマに関連する話の一部を紹介する。

—世界の虎の生息状況は非常に厳しくなっており、現在は3000頭程度で絶滅危惧種になっている。王子動物園にいる虎は“アムール虎”で、2019年にライプツヒの動物園から来たもの。

—とら年に入って、日本でもオミクロン株が虎のように猛威を振るっている。ヨーロッパでは連日何万から何十万の感染者が報告されており、我々も充分感染防止に努めないといけない。

—タイの動物園には多くの虎が飼われていて、虎使いの人もおり、おなかがいっぱいになった虎は人に危害を加えないので、虎と一緒に写真を撮らせてくれる。

—徳川家康はとら年生まれで、京都にある寺の唐門にはこの虎が刻まれている。江戸時代に日本には虎がいなかったため、彫り師は中国からの絵を参考にしたようだ。

—父はとら年生まれだったが、頑固で、他人の言うことは聞かず、自分の意思を通す人であった。よく言われる、とら年生まれの性格が、そのまま出た人であった。

—とら年生まれは、エネルギッシュで、やる気があり、冒険心に富み、リスクを取る事をいとわない、などと言われている。自身もとら年生まれで、良い点で似ているところがある。

—十二支(子、丑、寅)と十干(甲、乙、丙)があり、この二つの組み合わせで干支として使われ、それらは時刻や方角にも使われた。よく引き合いに出される、五黄の虎、は36年に一度巡ってくるが、まさに今年はその五黄の虎年である。

今後のドイツ語談話室の予定

第208回 2022年2月19日(土) 14～16時 テーマ：地球温暖化対策

第209回 2022年3月19日(土) 14～16時 テーマ：春近し

Deutsche Gesprächsrunde

Protokoll der 207. Deutschen Gesprächsrunde

Zeit: Samstag, 15. Januar 2022, 14 bis 16 Uhr

Thema: Das Jahr unter dem Tierzeichen „Tiger“

Dieses Mal hatte Herr Kosaku Harada die Gesprächsleitung und sprach zuerst über das Tierzeichen dieses Jahres, den „Tiger“. Die Tierkreiszeichen stammen ursprünglich aus China und haben heute noch in Japan etwas von ihrer Bedeutung behalten. Man sagt, dass im Zeichen des „Tigers“ Geborene mutig, unabhängig, dynamisch und positiv sind. Der Gesprächsleiter selbst ist im Zeichen des „Hasen“ geboren, wodurch sein Charakter harmonisch, feinfühlig und kultiviert sein soll. Die Charaktere, auf die die zwölf Tierkreiszeichen hinweisen sollen, sind jedoch von derart allgemeinem Wesen, dass wohl auf jeden irgendetwas davon zutrifft. Jeder kann daraus irgendetwas für sich ableiten.

Hier einige der Wortmeldungen zum Thema:

- Die wirklichen Tiger verlieren immer mehr ihres Lebensraumes, heute leben nur mehr rund 3000 Tiger auf der Erde, wodurch sie zu den vom Aussterben bedrohten Arten gehören. Der Tiger im Oji-Zoo ist ein Amur-Tiger. Er kam 2019 aus einem Zoo in Leipzig nach Kobe.
- In Zoos in Thailand kann man viele Tiger sehen, darunter auch dressierte Tiere. Wenn die Tiger satt sind, greifen sie keine Menschen an. Dann erlaubt der Dompteur den Besuchern Fotos von sich selbst mit dem Tiger aufzunehmen.
- Seit Anfang dieses Jahres wütet das Virus „Omikron“ auch in Japan wie ein Tiger. In Europa steigen die Ansteckungszahlen von Zehntausenden bis zu Hunderttausenden. Auch in Japan sind dringend Vorbeugemaßnahmen nötig.
- Der Shogun Tokugawa Ieyasu war im Zeichen des „Tigers“ geboren. Auf dem „Kara-mon“, einem Tempeltor im chinesischen Stil in Kyoto, findet sich eine geschnitzte Abbildung eines Tigers. In der Edo-Zeit gab es in Japan noch keinen Tiger. Der Künstler musste die Schnitzerei nach einem Bild aus China verfertigen.
- Der Vater einer Teilnehmerin war im Zeichen des „Tigers“ geboren. Sie bezeichnet ihn als eigensinnig, er habe nicht auf die Leute gehört und seine eigenen Ideen durchgesetzt. Er hatte also die für im Zeichen des „Tigers“ Geborenen typische Charakterzüge.
- Man sagt, dass im Zeichen des „Tigers“ Geborene energisch, aktiv, abenteuerlich und risikobereit sind. Eine Teilnehmerin, die ebenfalls im Zeichen des „Tigers“ geboren ist, findet bei sich selbst auch derart Charakterzüge.
- Es gibt die „Ju-ni shi“ (zwölf Tierkreiszeichen) und die „Jikkan“ (zehn Kalenderzeichen). Die Kombination dieser beide ergibt „Eto“ (die zwölf Zeichen des Tierkreises).

„Ju-ni shi“ und „Jikkan“ wurden auch als Zeit- oder Richtungsbezeichnung verwendet. Die Jahresbezeichnung „Go-ou no Tora“, welche oft Erwähnung findet, kommt einmal in 36 Jahren vor und fällt genau auf dieses Jahr, 2022!

Nächste Treffen:

Samstag, 19. Februar 2022, 14 bis 16 Uhr. Thema: Maßnahmen gegen die globale Erwärmung

Samstag, 19. März 2022, 14 bis 16 Uhr. Thema: Der Frühling kommt.

Stammtisch mit Zoom

ドイツで単身赴任：赤松 慎治郎

今回、登場していただくのはシスメックス株式会社グローバルマネジメント本部長の赤松慎治郎さんです。赤松さんには昨年11月27日の「日独交流160周年記念講演会」でも神戸の最先端の医療産業についてご講演いただきましたが、今回はご自身の話です。

赤松さんが Görlitz に赴任されたのは2013年のこと、Görlitz は Dresden から110キロ離れた、チェコとポーランドの国境近くの人口5万人ほどの市です。地元のオーケストラにいる人やドイツ人と結婚している人もいて、日本人は赤松さんが5人目でした。Görlitz と聞いて、よく映画の撮影に使われる町だとピンときたら、相当の映画通。Görlitz は戦争中も爆撃されず、昔のままの姿を残しているので、『グランド・ブダペスト・ホテル』などの様々な映画の撮影に使われ、『ハリーポッター』に出演されたエマ・トンプソンさんと会ったこともあるそうです。赤松さん自身は仕事の関係で Görlitz に住むとして、家族(夫人とお嬢さん)が何処に住むかが問題です。Görlitz には地元の学校しかありません。そこで日本人学校のある Berlin も考えましたが、インターナショナルスクールのある Dresden に落ち着きました。赤松さんは以前ブラジルに赴任していて、このお嬢さんは1歳から4歳をブラジルで過ごし、今回の赴任で7歳からの5年間をドイツで過ごし、海外生活のほうが多いとか。Dresden のインターナショナルスクールは6割がドイツ人で、外国人は4割くらいでした。こうして週末は Dresden に帰るといふドイツでの単身赴任が始まりました。

シスメックス株式会社の作る医療機器は医療関係者が相手で、Görlitz では世界三大感染症のエイズ、マラリア、結核の医療機器を作って、主にアフリカでビジネスを展開しています。この会社はシスメックス株式会社が新規に作ったのではなく、もともとあった企業を買収したものです。当初、地元の新聞に敵対的買収のような記事が載ったので、急遽、その翌日にプレゼンテーションを行って、敵対的買収ではないことを説明。従業員には職場集会を開き、雇用はそのまま守られることを伝えました。地元のビール会社 Landeskron のホールを借りて、従業員180人とイベントを開催したり、支店のある Münster は従業員が30人くらいなので、ホテルでクリスマスパーティを開いたりして、交流を図りました。Sysmex は、Görlitz では Siemens、Bombardier に次いで3番目に大きな企業なので、注目されていたのです。もともと赤松さんはこの企業の買収計画に携わっていて、通常、赴任するのは別の人で、まさか自分がそこに行くことになるとは思わず、その前年の2012年に家を新築したばかり、新車も納入待ちだったそうです。それが自分が赴任することになって吃

驚です。赤松さんは英語で仕事をされていたとお聞きして、グローバル企業の中では英語が普通なのかと思っていましたが、実は工場の従業員の多くは英語が苦手で、赤松さんの英語のスピーチも、ドイツ語に通訳してもらっていたとのこと。Görlitz は旧東ドイツで、以前は学校でロシア語を学び、英語が分かるのは35歳以下というのも納得できます。

ドレスデンは大変美しい町で、食べ物も美味しく、シュトーレン祭りなどもあり、ドイツでの生活を堪能されたそうです。
(理事 押尾愛子)

2月の Stammtisch mit Zoom のお知らせ

日時：2022年2月19日(土)午前10時～11時

話題提供：兵庫労働局職業安定部長 藤井 剛 氏 (ドイツ語講座受講)

国家公務員である藤井 剛氏は、人事院の制度により2002年から2004年までドレスデン工科大学に留学されていたそうです。留学の経験や大学の授業の様子、ドレスデンでの生活などについてお話しいただきます。

3月の Stammtisch mit Zoom のお知らせ

日時：2022年3月19日(土)午前10時～11時

話題提供：by神戸日独協会会員 武村 陽子 さん

海外旅行の添乗員としてご活躍の武村 陽子さんは、スペイン語と英語の通訳ガイドをお持ちですが、このコロナ禍で時間があるのを利用して、昨年、ドイツ語の通訳ガイドの資格も取得されました。海外旅行、ガイド、外国語の魅力などについていろいろお話しいただきます。

神戸日独協会 Stammtisch mit ZOOM

<https://us02web.zoom.us/j/85366355191?pwd=N05kSTl1blVhYkNqc2kvQmd5VjlpQT09>

ミーティングID: 853 6635 5191

パスコード: 393924

事務室からのお知らせ

2月と3月に神戸大学国際人間科学部の東 和佳奈さんと上野隼人さんが当協会にてインターンシップ実習を行っています。よろしくお願ひします。

会報印刷・発送ボランティア募集

会報の印刷と発送を手伝ってくださる方を募集しております。次回の印刷と発送は3月10日(木)を予定しています。お手伝いいただける方は事前に事務室へご連絡下さい(TEL 078-230-8150)。

印刷：兵庫県国際交流協会作業室(神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番1号

国際健康開発センター2階、県立美術館西隣)にて、10:30より1時間半程度

発送：神戸日独協会にて、12:30～